

小田実全集（評論 第12巻）

小田実 小説世界を歩く

— 漱石からジョン・オカダまで —



講談社

小田実全集

Makoto Oda



まえがき

小説の書き手に想像力の働きのというものがあつて、小説を書くという作業のバネになっているのならば、読み手——読者のほうにも、読者の想像力というものがあるにちがいない。その働きがあつてはじめて、元来は紙の上の文字の羅列にすぎないものが、現実世界のたたずまいをもつて身に迫つて来る。「美女」が、ただの二字の漢字の結合から、彼女のふとしたまなざしの変化、からだの動き、動きとともにほのかにただよつて来るからだの匂いととも立ちあらわれて来るのは、もちろん、そこは小説家のみごとな筆さばきに喚起されることだが、読者の想像力の働きがあつてのことだ。もちろん、もちろん、まずあるのは、必要なのは、小説家の想像力だ。しかし、いくら小説家の想像力がいかにみごとに羽ばたこうとも、読者の想像力が眠つてしまつていては、それこそ絵に描いたモチ、いや、二字の漢字にすぎない「美女」だ。ほのかに匂つて来たりはしない。

もちろん、想像力だけで小説は書けない。想像力の働きがバネとしてあつて、そこから小説家は自分のものもろの体験やら認識やら思想やらをくり出して小説世界をつくり出して行くのだが（どんなに無思想小説を標榜する小説にあつても、人生、社会、はたまた小説それ自体に対する小説家の「思想」はいやおうなしに出て来るものだ。もちろん、この本の最初にとり上げた「猫と庄造と二人のおんな」

について批評家が浅薄にやつてのけたようなかたちでとらえられるものではないにしてもだ。同じことは体験にも言えて、どんなに無体験小説を売り物にする抽象的な作品にあつても小説家の体験は投影している)、読者の側も想像力とともに自分の体験、認識、思想をくり出して小説を読んでいるのだ。もちろん、こんなことは今さらあらためて言うまでもないことだろう。若いとき熱中した作品が年をとつてあらためて読み返してみるとなんと子供っぽくて読むにたえなくなつていくというのは誰しも体験することだ。そして、かえつて、若者の時代には放りっぱなしにしてあつた作品がふしぎに魅力をもつて来たりする。

小説は小説家の想像力、体験、認識、思想だけでは書けない。これもあたりまえのことだ。小説世界は文章によつてかたちづくられる世界で、ここでおのずと問題になつて来るのは小説家の文体だろうが、文体のことを言うなら、読者の文体というものもあるにちがいないと私は思う。もちろん、これは読者の頭の奥ふかくにしまい込まれた文体で、実際には書かれることのない文体だが、小説家が紙の上に文字の羅列によつてつくり出した小説世界を読者がいわばわがもの、わが世界として受け入れて行くのには、小説家の文体と読者の文体の微妙なかかわりあいが必要な働きをしているのにちがいない。そのかかわりあいはおおむね感応と言つてもいいかかわりあいだが、ただ、いつもいつも、耳にこころよい文体にひかれて(それはたいいてい保守的なものだ)読者は小説世界のしかけのなかにひきずり込まれて行くのではないだろう。ときには、ザラついた感触、反撥によつてもひきずり込まれて行くのは、恋愛の手れん手くだとそこは大いに似ている。そこらあたり、なかなか面白いところで、

そういう事情がないと、小説家の文体、どれもこれも、この本のおしまい、ジョン・オカダの「ノー・ノー・ボーイ」にふれて書いたように、「グッド・ジャパニーズ」、「文章読本」のお手本みたいなものになってしまうおそれがある。

小説というもの、こんなふうを考えて行くと、書き手としての小説家、小説家がつくり出した小説世界、そこにひきずり込まれて行く読み手、読者の三つから成り立っていることが判る。ここで小説世界と言つて、主人公とも登場人物とも言わないのは、小説世界は何も彼ら人物によつてばかりで成り立っているのではなくて、小説家が彼らの背景として描き出す家具調度のたぐい、あるいは、彼らをまき込んで動く社会、経済、政治もそこにはあつて、もう少しふり幅の大きいところであることをとらえておきたいからだ。もちろん、そんなふうによつて、小説家というより彼が住み、そこで生きていく小説家の世界、そして、同じ意味での読者の世界をそこで考え出して行くこともできる。とすると、小説というもの、小説家の世界、小説世界、読者の世界という三世界の三つドモエだが、その三世界ともに現実のより大きな世界の一部ではある。いや、一部ではあるが三世界ともそれぞれに自らの世界を形成しようとしていて、そこまで考えて行けば、小説は四つの世界の四つドモエで成り立つていて、小説の面白さ、実は四つドモエが交錯し、ぶつかり、結びあう、そこでの面白さでないかと思う。そういうこと——そういう面白さのことを自分なりに考えてみようと思つて、私はこの本のもとななる一連のつづきものの文章を書いた。

目次

- まえがき 3
- 1 「フンシ」のおいの力——谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のおんな」 10
- 2 下手クソで、ゆたかな小説——有島武郎「迷路」 27
- 3 「都会男」による「都会男」の小説——武田麟太郎「井原西鶴」 45
- 4 「土」の文章のこと——長塚節「土」 62
- 5 「小説家」のくらしの話——徳田秋声「仮装人物」 77
- 6 「人びと」を描くということ——徳永直「太陽のない街」 92
- 7 乗合船の話——前田河広一郎「三等船客」 108
- 8 ある否定しがたい力——金史良「郷愁」 122
- 9 総理大臣の胸のうちとまわりの風俗——徳富蘆花「黒潮」 137
- 10 文章の力——夏目漱石「坊っちゃん」 152
- 11 「私小説」におけるつきあいの強制について、他——嘉村礒多「業苦」 167
- 12 大きな小説——壺井栄「大根の葉」 183
- 13 それから、のこと——原民喜「火の昏」 197

14 「番外」の重大な小説——ジョン・オカダ「ノー・ノー・ボーイ」
あとがき

小田実 小説世界を歩く

—— 漱石からジョン・オカダまで ——

1 「フンシ」のにおいの力——谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のおんな」

○

この「猫と庄造と二人のおんな」について、ある批評家がある文庫本の解説に次のように書いている。「ある」、「ある」と書くのは、べつにその批評家をやつつけるのが、この文章の目的でないからだ。もつとこの小説自体の小説世界をたのしみたい気持が私にはある。

「男女同権の思想も、社会の改革のめざす思想も、一匹の猫を愛したために苦しむ庄造の心を救いえない。それが谷崎潤一郎の思想であり、彼の文学の真の異端性の根拠でもある。人間は進歩や解放などを求めてはいない。あるいは自由さえも求めていない。人間が心の底で求めているのは、女であれ猫であれ、あるいはイデオロギーであれ、一つの対象のために奴隷になるということである。そしてそのために身を滅すこと以外に、人間の栄光はもはやないのかもしれないのである。もしこういう感覚を理解できないなら、そういう人は、あの楽天的な「進歩と改革」の理想を信じ続けるがよろしいであろう。」

こういう見当ちがいの解説が大出版社の発行する文庫本に出て来ているのだから、おどろくほかはない。筆者はかなり世に名前の通った批評家だが、一読して、彼は「文芸批評家」ではなく「社会批評家」

なのではないかと思つた。たぶん、彼は「あの楽天的な『進歩と改革』の理想」（何が「あの」なのか、判らないし、「進歩と改革」の理想）がなぜそれだけで「楽天的」なのか、私にはさっぱり判らない）が嫌いなのだろうか、そして、文学の世界に「進歩」や「解放」や「自由」というような「イデオロギー」を持ち込むことを極端におそれているお人柄と文学観の持ち主なのになにがいないのだが、こういうのこそ、私の眼には「イデオロギー批評」の典型に見えて仕方がない。悲憤コーガイ、張り扇の音がして、三島由紀夫氏の批評をするのにはあるいはふさわしい文体かも知れないが、「猫と庄造と二人のおんな」を解説する文体ではない。声が上ずっている。そして、こけおどしの文句を並べている。こういう調子の文章を読むと、ふしぎに私は今はひと昔、「全共闘」の学生運動の諸氏がかんだかい声でよくやつていた演説を思い出すのだが、このたぐいの居丈高で空疎な文体の文章が、このごろ、「男女同権の思想」や「社会の改革のめざす思想」もきらいな、あるいは、それらが文学の世界のなかに持ち込まれることに身ぶるいを感じているらしい人たちのほうにむしろ数多く見られるのはふしぎなことだ。

思うに、この解説の書き手をふくめて、この種の批評家たちは文学——小説がたいして好きでもないのだろう。それでゆつたりと小説家がつくり出した虚構の世界——小説世界のなかに遊ぶ代りに、せっかちで居丈高な「イデオロギー」批評をやつてのけるにちがいない。批評家として（「社会批評家」としてならいざ知らず「文芸批評家」として）ふむきな人がおおぜい批評家になっているという感じが人びとの書くものを見ていると感ぜられて来て仕方がないが、そういう人には、三島氏の小説世界なら、それとも、谷崎氏の場合で言うなら、「春琴抄」あたりのいかにもアタマで書いた作品あたり

までなら批評、あるいは、解説はできても、「猫と庄造と二人のおんな」のようなたたかな小説世界の散歩はできかねるにちがいない。人間、それぞれに得手不得手、むきふむきというものがある。さっきの解説の書き手は、「猫と庄造と二人のおんな」は自分の手にあまると言つて執筆の依頼を断わるべきだった。それがこのみごとにつくり上げられた小説世界に対するせめてもの礼儀だったにちがいない。そして、文庫本の出版元である大出版社（それは「文芸」出版で名高い出版社なのだが）もこんな解説はのせるべきではなかった。それが、この小説世界に作者とともに遊ぼうとする読者へのせめてもの心づかいと言ふべきものだろう。

まず、こだわるみたいだが、作者はこの小説世界のなかで、主人公庄造の心を救おうなどはユメにも思つていないにちがいない。この人間の心を救う救わぬというようなことほど、この小説世界に無縁なことがらはなくて、それは、「男女同権の思想」や「社会の改革のめざす思想」、あるいは、「進歩」「解放」、「自由」がこの小説世界と無縁なことからであるのと同じことだろう。そして、「一つの対象のために奴隷になるということ」も、たとえ、その対象が「進歩と改革」というようなくだらぬイデオロギーでなくて、庄造が追い求めてさまよい歩く猫であったところで、この小説世界には無縁な思想であるにちがいない。庄造は猫が好きだが、そのためにさまよい歩くが、「そのために身を滅すこと」など考えてはいやしないのだ。彼が愛した「リリー」は品子という新しい保護者を得たために庄造にそつぽをむくが、何、庄造だつて代りの猫を手に入れることができれば、同じように「リリー」を明日にも冷たくあしらうかも知れない。そんなふうなものとして作者は猫と庄造との関係をうまく描きあらわして、猫も庄造も作者も、あるいは、「二人のおんな」ももう少し浅薄にしたたかだろう。

彼らは「一つの対象のために奴隷にな」ったりはしない。まして、「そのために身を滅」して「人間の栄光」などというくだらぬものを得ようとしたりしてゐるのではない。彼らはもつと中途半端な存在なのだろう。そして、その中途半端性において徹底してゐる。だから、ふつうの人間なのだが、作者は共感をこめてそのふつうの人間の世界を描いてゐる。

中途半端性にうんざりしながら（それは自分にうんざりすることでもある）、そこに愛情をみなぎらせてもいて、それでいい作品になつてゐる。作者自身、彼らを冷たく突き放してはいない。しかし、同時にべつたりとくつついてもいない。とがめだてもしなればゆるしもししていない。この態度そのものが中途半端で、それでいいものになつてゐる。批評家の作品をけなすときのキマリ文句に「もつと主人公を突き放せ」というのがあるが、あるいは、逆に「作者は主人公に何の愛情ももっていない」というのもあるが、「猫と庄造と二人のおんな」の作者はどちらの種類の批評家からも叱られるようなまんなかあたりでウロウロしてゐて、それはちょうど「猫」と「二人のおんな」のあいだにはさまれてさまよい歩く庄造の位置そのままのありようだが、そこにかえつて腰をすえて谷崎氏はこの小説世界をつくつた。

○

しかし、小説というものの、もともと中途半端なものではないか。もともと、小説は実人生と藝術の双方にあいわたるもので、そこが小説世界のかんどころで、かんどころは中途半端、そこにおいて徹底するということだ。さっきの解説者は「男女同権の思想も、社会の改革のめざす思想も、一匹の猫

を愛したために苦しむ庄造の心を救えない。それが谷崎潤一郎の思想であり、彼の文学の真の異端性の根拠でもある」と言うのだが、そんな簡単なことが「猫と庄造と二人のおんな」の世界のようなややこしい（これがややこしくなかつたら、世の中、何がややこしいというのだ。このややこしにくらべると、たとえば、三島氏がつくり出した小説世界は何んと単純で浅いことか。あるいは、人間の内部のふところ深いところをひたすらに書いたと称するこのごろはやりの小説家たちの小説世界も、その内面はおどろくほど浅くて、すぐウラがすけて見えてしまっていたりする）小説世界の海千山千の作者の「思想」なのか。彼の「思想」はこういう単純な人間及び事物の認識よりはもう少し複雑でもあればふところ深くて、人間にも事物にもいろいろあつて、「男女同権の思想」やら「社会の改革のめざす思想」やらが「一匹の猫を愛した」「庄造の心を救えない」のなら、「一匹の猫」のほうも「救えない」のでないかと思つてゐるのだろう。いや、さらに彼の「思想」はふところ深くて、「一匹の猫」がそれを「救いえ」るのなら、「男女同権の思想」や「社会の改革のめざす思想」も「救いえ」るのかも知れないとことのあるやうをとらえている。人間世界、それほど深くもあれば幅広くもあつて、そのはしばしのところにも（庄造がその「猫」と「二人のおんな」といつしよに位置してゐるあたりは、たぶん、そこらあたりだろう）眼をとどかせておかなければならないとすると、「思想」のほうもそれに見合うだけの深さも広さも必要とする。

せんじつめて言えば、庄造の心を救う救わぬということにおいて、「男女同権の思想」も「一匹の猫」も変りはないのだ。二つは平等、対等なところに立つていて、価値の上下はない。「猫と庄造と二人のおんな」の世界がそのややこしきにかかわらず案外サツパリと乾いた感じがするのは、そういう

う本物の平等観、対等観が作品の背骨に通っているからだろう。そこでふしぎに民主主義的なのである。実際、この作品、庄造の現在の妻福子と彼の関係は言うに及ばず、追い出された品子だつて、けっこうひとりで自活して生きて行っている女なのだ。なにしろここで猫も人間たちをけっこうふりまわす存在としてあるのだから、そこにだつて対等、平等の関係がある。ここには「男女同権の思想」はないかも知れないが、「男女同権」はふしぎに存在している。そして、そのおかげで、この小説世界、全体として「男女同権の思想」になつてゐる。

蛇足をつけ加えて言つておけば、谷崎氏は、もちろん、「男女同権の思想」など鼓吹するためこの小説世界をつくり出したわけではない。しかし、そうかと言つて、「男女同権の思想」はくだらぬ、それよりはオレは「一匹の猫」だ、そちらにこそ、そちらに執着する人間の心のほうにこそ、人間の真実があると力んで、「男女同権の思想」などもうろをやつつけるためにこの小説を書いたわけでもないだろう。つまり、彼にとっては、庄造の心を救う救わぬというようなことはどうでもよいことだ。そういう問題の立て方、とらえ方とはべつのところ、彼の小説世界をこしらへ上げる手は働いていて、そこで「猫と庄造と二人のおんな」の作者は「異端」どころかことばのもつともまつとうな意味あいにおいて「正統」派の小説家となつてゐる。「春琴抄」あたりでは、彼にはまだそこらでとらわれているところがあつた。この種の解説者によつて捕捉され得るような「谷崎美学」によつて自分がふりまわされているようなところがあつたということだ。しかし、このあたりで、ふつきれている。その手の「美学」なしに世の中にむき出しに對しようとしている。おかげで、救うとか救われぬとか、そんなところで動いてはいない世の中の動きというものを彼はつかみとることができた。私はここで、

彼が本格的に小説家になったような気がする。「猫と庄造と二人のおんな」のあと、本格的小説世界の構築がつづく。では、それ以前は何か。面白い美学的、哲学的エッセイを書いたような気がする。そして、「細書」以後、彼はまたそのエッセイの世界に立ち戻った。

○

私の小説論は簡単で、小説とは、曰く言いがたしを書くものだと思っている。それからもうひとつ、何をどう書いてもよい。いや、さらにもうひとつ、何から書いてもよい。何がキツカケになって小説世界がつくられてもよい。

曰く言いがたしのほうから言うと、「美学」で世の中、人間、とらえられるのならけっこうなことだ。しかし、ほんとうにはそんなことがなかなかできかねるのは、「政治」で、「経済」で、あるいは「思想」で、「イデオロギー」でとらえかねるのと同じことだ。あるいは、「猫と庄造と二人のおんな」の主人公たち、猫のリリーをふくめて、まあ、「庶民」というようなものだ。その「庶民」をありきたりの「庶民哲学」(で、このところ、作品を書いている人が多い。いかにも「庶民」らしいのが登場して来るのだ。一口に言えば、ものは考えない。観念世界がない。しぶとい。ふてぶてしい。一筋ナワで行かぬ)で切ってみても、切れたものでない。人間、もう少し、「庶民」であろうとなかうと、思考のふり幅も大きければ、くらしのふり幅も大きいのである。どうしたって、曰く言いがたしが残る。それが人間の思考、くらしの本質と心得たとき、はじめて小説ができる。小説世界ができ上る。すなわち、エッセー世界でなくなっているのだ。

ここで話は逆説的なことになる。「庶民」に、こんな商売も何もかもそつちのけにして「一匹の猫」にウツツをぬかすようなのがほんとうにはたしているのか。それに庄造はなかなかの「愛情哲学」の持ち主で、その哲学で自分のその行為を内観する。「庄造は、母親からも女房からも自分が子供扱いにされ、一本立ちの出来ない低能児のように見做されるのが、非常に不服なのであるが、さればと云つてその不服を聴いてくれる友達もなく、悶々の情を胸の中に納めていると、何となく独りぼつちな、頼りない感じが湧いて来るので、そのために尚リリーを愛していたのである。実際、品子にも、福子にも、母親にも分つて貰えない淋しい気持を、あの哀愁に充ちたりリーの眼だけがほんとうに見抜いて、慰めてくれるように思い、又あの猫が心の奥に持つていながら、人間に向つて云い現わす術を知らない畜生の悲しみと云うようなものを、自分だけは読み取ることが出来る気がしていたのであったが、それがお互いに別れ別れにされてしまつて四十余日になるのである。」

まあ、男が猫を好きになることはある。「一匹の猫」に「二人のおんな」のこともかまわずウツツをぬかすこともある。しかし、「十三四の頃、夜学へ通いながら西宮の銀行の給仕に使われ、青木のゴルフ練習場のキャディーにも雇われ、年頃になつてからはコックの見習を勤めたりしたけれど、何処も長つづきがしないで怠けているうちに父親が亡くなつて、それから此方荒物屋の亭主で納まつてしまつた」、「猫を可愛がることと、球を撞くことと、盆栽をいじくることと、安カフェエの女をからかいに行くこととぐらいより、何の仕事も思い付かない」男がこういうことを考えるのか。いや、考えることはあるとしても、そんなふうなことばづかいで考えるものなのか。たとえば、そのころ（一九三六年ごろ）のそういう男は、猫が好きだという自分の気持を「愛していた」というぐあいにとらえ

て考えたのかどうか。そこは、やはり、「好きだ」ということばで自分の気持のを感じとつていたのではないか。このあたり、「庶民哲学」——ありきたりのそれから言つてどうあつても不自然だろう。そして、そこが逆説の逆説たるゆえんだが、その不自然さのゆえにかえつて庄造は「庶民」らしく描き出されている。「庶民」の典型として小説世界のなかに確固として位置している。それで、「庶民」の男が「一匹の猫」にウツツをぬかすというふうなふつうあり得ないことが、「庶民」ならみなさもありなん、そうするにちがいないと感じさせるまでな力をともなつて描き出される。

○

曰く言いがたしのをとらえるのにはいろんな方法がある。ケンラン、人をおどろかせる文体の力でとらえるやり方もあれば、想像力の華レイさで曰く言いがたしを掌中のタマと化する小説家もある。当代の例で言えば、三島由紀夫氏にはいくぶん前者の気味があるし、大江健三郎氏は後者の性へキをもつ小説家だろう。谷崎氏自身について言えば、「春琴抄」には前者が目立つし、後者は「盲目物語」というよりは、むしろ「卍」か。「猫と庄造と二人のおんな」の小説世界ではそれが細部の力になつていて、そういうのが小説世界の構築法でもつとも「正統」であるような気がする。鬼面人をおどろかしはしない。また、はなやかな夢に包まれたりはしない。ただ、たしかなやり方で、いったんでき上つてしまえば、この小説世界にはゆるぎがない。

細部をたしかによく見ている。

『『そうれ！』』

と、(小アジの二杯酢を) 鼻の先まで持つて行つてから、逆に自分の口の中へ入れる。そして魚に滲みている酢をスツパスツバ吸い取つてやり、堅そうな骨は噛み碎いてやつてから、又もう一匹摘まみ上げて、遠くしたり、近くしたり、高くしたり、低くしたり、いろいろにして見せびらかす。それにつられてリリーは前脚をチャブ台から離し、幽霊の手のように胸の両側へ上げて、よちよち歩き出しながら追いかける。すると獲物をリリーの頭の真上へ持つて行つて静止させるので、今度はそれに狙いを定めて、一生懸命に跳び着こうとし、跳び着く拍子に素早く前脚で目的物を掴もうとするが、アワヤと云うところで失敗しては又跳び上る。」

ここにはまた「皿の上には約二寸程の長さの小鰯が十二三匹は載つていた筈だが」(傍点筆者) というような描写もあるのだが(ふつう文体の美にことさらにこる小説家なら、文体のリズムをこわしてまで「約二寸程」というようなことばをはさみ込んだりしないものだ。もちろん、谷崎氏は人一倍文体にこつたほうだが、それでも、この「約二寸程」ということばは彼にとつてぬきさしならぬ細部の規定のことばだったわけだ)、そういう本物の「存在」の細部の描写よりは、「運動」の描写のほうに注目しておきたい。いったいに「猫と庄造と二人のおんな」の小説世界がいかにも生きてくる感じがするのは、言うまでもなく「猫」がいきいきと描かれているからだが、それは「猫」の動きがよくとらえられているということだ。人間であれ、汽車であれ、動いているものの描写はむつかしいものだが、猫の「運動」もなかなかうまくとらえられない。谷崎氏、そのところを手ぎわよくやつてのけていると思う。おかげで、さっきのくだりを読んでいると、私は口のなかがすっぱくなつた感じがしてツバが出て来る。ちよつと食べてみたいと思う。食い物の描写が出て来て、それを食べたくなつたら、

描写はまちがいでなく成功しているにちがいない。私はこの小アジの二杯酢の描写とからんで「取れ取れ」ということばを何度か読んでいるうちにおぼえてしまった。「阪神電車の沿線にある町々、西宮、芦屋、魚崎、住吉あたりでは、地元の浜で獲れる鰺や鰯を、『鰺の取れ取れ』『鰯の取れ取れ』と呼びながら大概毎日売りに来る。『取れ取れ』とは『取りたて』という義で、値段は一杯十銭から十五銭ぐらい、それで三四人の家族のお数になるところから、よく売れると見えて一日に何人も来ることもある。」

これで十分に細部だ。しかし、谷崎氏は細部には神も宿るが小説も宿ると考えているらしくてさらにつづける。「が、鰺も鰯も夏の間は長さ一寸ぐらいのもので、秋口になるほど追い追い寸が伸びるのであるが、小さいうちは塩焼きにもフライにも都合が悪いので、素焼きにして二杯酢に漬け、笹莪を刻んだのをかけて、骨ごと食べるより仕方がない。」たいしてうまくもない感じのものだが、それでも「取れ取れ」というかけ声がついていけるとなると、ちよつと食べた気にもなつて来る。(ことに、「取れ取れ」の声が一向にきこえて来ない昨今においてそうだ。私は今かつての「取れ取れ」の地でもあればリリー曾遊の地でもある西宮でこの文章を書いているのだが、このあたりの海は今や「公害の海」でもう「取れ取れ」の鰺や鰯が取れるのどかな海ではない。)

○

このあたりで、話は自然に私の小説論の第二の骨子の、小説は何をどう書いてもよいのだに移っている。実際、曰く言いがたしを書くのだから、何をどう書いてもよいというのがせんじつめれば唯一

の方法論だということになる。男がある日目がさめてみるとカブト虫になっていたとしても仕方がないのである。しかし、そういうのだけが、この私の何をどう書いてもいいのだという小説論の言おうとしていることではない。この猫の話だって、男がカブト虫になることぐらい不自然でないこともない。「……わてはなあ、相手がリリーだけやったら、何もうるさいこと云えしまへんで。リリーに会いに行く云うても、リリーだけやあれへんさかいに云いまんねんで。いつたいお母さん、あの人とグルになつて、わてを欺すようなこととして、済むと思うたはりまんのんか。」と庄造の現在の妻の福子は怒るのだが、こういうのが「常識」の世界の認識であり、人間観、猫観の集大成だろう。庄造自身が「たか、猫なんぞ」と言っているのだが、そんなたぐいの「常識」とかけ離れたものをこの小説世界はうまくつくり出している。そこが面白いのだ。読んでいて、さもありなんと思う。オレだつて彼みたいなことになれば、猫会いたさにアンパンを食べながら二時間ほども今はリリーの持ち主となつたもとの女房の二階借りの家の裏手に立っていたりするだろうと思う。いや、そんな感じがして来る。人間いろいろあるものだ。しかし、そのとき、そのいろいろある人間のうちのひとりに自分もなつてゐる。そんなふうを感じとつている。それはそのときそれだけ自分の世界がなみの自分の世界よりもひろくなつてゐるということだろう。そして、それがこの元来は狭いはずの小説世界をひろびろとさせて、ふしぎに自由を感じさせるのだろう。「春琴抄」を読んでいると、作者の「美学」、「哲学」に読み手は無理やりに取レンさせられて行く感じがする。しかし、この世界にはそんなところがない。道はひろがつていて、読み手は勝手に歩いて行くことができる。そして、そのはてに世の中というものがあつて、もう少し小むずかしく言うと、社会がある。そのころの時代の社会の空気、たしかにこの

小説世界はよく伝えてくれている。「細雪」が「猫と庄造と二人のおんな」が住む世界よりももう少し階級的に上のところの世界を描いているとすれば、この小説はよくその補完をなしている。二つがひとつになって、巨大なくさのまえの、しかし、もういくさはほんとうには始まっていたころの日本社会のたたずまいのかなり奥まったところにまで歩いて行くと到達できる。

○

何をどう書いてもよいということは、何から書いてもよいということだろう。小説家は何から始めてもよい。べつに順序のことを言っているのではないので、何をキツカケにして小説世界をつくり出してもよい。そう言ったほうがいいだろう。そちらのほうが言い方として適切だ。

私の見るところ、この小説のキツカケはひとつは猫の「運動」だろう。猫を飼っていて面白いのは、やはり、それが自分のまわりをうろつき歩き、じやれて来るからだ。ツボを眺めて面白いというのはちがう。まず、谷崎氏も猫好きで、あんなふうにに小鯨の二杯酢で自分の愛猫を釣っていた。それを見ているうちに、この一篇の小説世界の構図が胸のうちにわいて来た。これが第一の仮説。

しかし、キツカケはもうひとつあって、これもまた猫「運動」説と劣らぬぐらい重要なことだが、「フンシ」という猫の排セツ物の処理装置だ。いや、もう少し正確に言うと、その処理装置が発するにおいだ。谷崎氏はくり返して処理装置とにおいのことを書いています。力をこめて書いていて、「力説」ということばがあるのだから「力描」していると言つてもいいだろう。「庄造に云わせると、この猫は決して粗勿をしない、用をする時は必ずフンシへ這入ると云う。いかにもその点は感心だけ

ど、戸外にいてもわざわざフンシへ這入るために戻って来ると云う調子なので、フンシが非常に臭く
なつて、その悪臭が家中に充満するのである。おまけに臀の端へ砂を着けたまま歩き廻るので、昼が
いつもザラザラになる。雨の日などは臭が一層強く籠つてむツとするところへ持つて来て……」こ
う臭い「フンシ」をつくるのに、人間どもはなかなか苦勞をする。庄造の手からリリーをとり上げ
ることに成功した品子はその苦勞を始める。「この珍客にはフンシが必要だと気が付いて、昨夜慌
て炮烙を買いに行つたのはいいが、砂がないのには困つてしまつて、五六丁先の普請場から、コンク
リートに使う砂を闇にまぎれて盗んで来るやらして……」しかし、せつかくの彼女の好意も猫のほう
はなかなか受け入れてくれない。「でも食べものを食べてくれて、フンシへ小便を垂れるようになって
くれたら大丈夫だと、それを頼みにしていたのだが……」、「もうこの上は根較べをして、気が折れ
て来るのを待つより外に仕方がない、なかに、ああして食い物とフンシとを眼の前に当てがつておき
さえすれば、いくら剛情を張つたつて、しまいにはお腹が減つて来るから食わずにいられないであ
ろし、小便だつて垂れるであらう……」しかし、そう思い通りにこの強情猫は動いてくれそうにもな
い。「……暫くひとりにしておいたら、その間に食べるものは食べ、垂れるものは垂れるかも知れな
いと、そうも期待していたのであつたが、勿論そんな形跡もない。彼女は『チョツ』と舌打ちをして、
今も部屋のまん中に空しく置かれてある御馳走のお皿と、砂が少しも濡れていない綺麗なフンシとを
恨めしそうに睨みながら、針箱の傍にすわる。」そのときの彼女の絶望感はよく判るような気がする。
しかし、彼女はさすがに努力の人だ。「駄目と知りながらも食べものをすすめてみたり、フンシの位
置を換えてみたり……」そうしながら、彼女は期待する。「明日の朝眼を開いた時あのお皿が空になつ

ていてくれたら、そうしてフンシが濡れていてくれたら……」しかし、まどろんでから眼をさますと、「食べ物もフンシもそっくりそのまま並んで」いて、そのうち、「見ればフンシの砂の上に大きな塊が落ちてあ」という夢まで見る。

それでも言うことをきかないのだから、品子が腹を立てたとしてもふしぎはない。その怒りの表現のひとつが、『「食べるのが嫌なら小便をしろ」と、フンシ」を突きつけることだったのだから、「フンシ」は彼女の生活に大きな意味をもつて来た。そのうち、猫は「家出」を敢行して、あげくのはては立ち戻つて来て、そのあとは品子に打つて変つたようになつくのだが、品子のほうも猫に格別の親愛の気持をもつ。一種の共感がそこで二人のあいだに成立するのだが、そのときのキメ手となるのは、またしても「フンシ」であり、「フンシ」の臭気で、そのあたりで二人の共犯者めいた関係が庄造なしに成立するようになる。庄造を放つておいて二人がその臭気でグルになつたのだから、共犯者もいいところだろう。彼女はそこで昔の庄造との家庭生活を回想するのだが、それは過去がなつかしいだけであつて、その過去には庄造がいてもいなくてもいいのだ。しかし、猫だけはいなくてはならない。でないかと、かんじんの臭気はない。「そしてフンシの砂の中へ日に幾度か排泄物を落すので、いつもその匂が四畳半の部屋の中へむう、ツと籠るようになったが、彼女はそれを嗅いでいると、いろいろな記憶が思いがけなくよみがえつて、芦屋時代のなつかしい日が戻つて来たように感ずるのであつた。なぜかと云つて、芦屋の家では明けても暮れてもこの匂がしていたではないか。あの家の中の襖にも、柱にも、壁にも、天井にも、皆この匂が滲みついていて、彼女は夫や姑と一緒に四年の間これを嗅ぎながら、口惜しいことや悲しいことの数々に堪えて来たのではないか。だが、あの時分には、この鼻持ち

のならない匂を呪つてばかりいたくせに、今はその同じ匂が何と甘い回想をそせることよ。あの時分にはこの匂故にひとしお憎らしかつた猫が、今はその反対に、この匂故に如何にいとおいしいことよ。」

しかし、この甘美な悪臭を維持するためには日常的な努力がいる。「それにもうひとつ厄介なのは、フンシであつた。」「砂を換えずに放つておくと、とても臭気が激しくなつて、しまいに階下へまで匂つて来るので、妹夫婦が嫌な顔をする」というのだ。それで「よんどころなく、夜が更けてから彼女はそうツとスコップを持つて出かけて行つて、その辺の畑の土を掻いて来たり、小学校の運動場から滑り台の砂を盗んで来たり、そんな晩には又よく犬に吠えられたり、怪しい男に尾けられたり」する。

人間、何ごとにも努力が肝要だ。こういう日常的な努力のはてに「フンシ」のにおいは保たれて、そのにおいの力は品子と猫のあいだにゆるぎのない関係——共犯関係をつくり上げる。ここでべつにこの小説世界は努力が人間には必要ですとそんなイソップの寓話みたいなことを言っているわけでは決してないが、事実としてはそういう結果になつて、モンモンの日々のはてにようやくリリーに会うことができた庄造はそのにおいを嗅ぎながら、もうそのにおいのなかに入つて行けない。「と、突然庄造は、久しい間忘れていたあの特有の匂を嗅いだ。嘗て我が家の柱にも壁にも床にも天井にも沁み込んでいたあの匂が、今はこの部屋に籠つていたのであつた。彼は悲しみがこみ上げて来て、『リリー、……』と覚えぬ濁声をあげた。」しかし、リリーはまったく無感動に反応を示さない。「前脚を一層深く折り曲げ、背筋の皮と耳朶とをブルン！ と寒そうに痙攣させて、睡くてたまらぬと云うように眼を閉じてしまった。」みごとな拒否、いや、無視、無関心の「運動」の描写だろう。「フンシ」のにおいの力は庄造をひきつけるが、同時に、その力そのものから言えば、彼をにおいの外に放り出す。そ

ういう力をもつものとして、「フンシ」のおいはある。においは悪臭と言つてもたいして強烈なものではないし、そうかと言つて、もちろん、香水のごとき甘美なおいではない。まことに日常的な、中途半端なおいだ。しかし、そこで徹底することにおいて、力になっている。ひきつけ、しかし、同時に拒む、無視する、無関心でいる力になっている。それで「フンシ」のおいの世界、それが立ちこめる。谷崎氏の小説世界はひとつの強力なものとして存在している。

○

小説を論じるにあたって、すぐさま小説家を論じるかたむきが昨今はなほだしいように思う。小説世界のことを考える代りにすぐ「作家の世界」の話になる。すぐさま「作家論」になつて、小説家の「美学」やら「思想」やら「イデオロギー」やら、「政治行動」やらの話になつて面白くはない。ことにそういう傾向が文学至上主義者みたいな批評家に多いのはどういうことだろう。私はもう少し小説世界そのものにこだわりたいと思う。しばらく小説世界そのもののなかに遊んで、そこで考えもすれば、たのしむこともしたい。いや、小説というもの、まず、たのしむものであろう。それで、こういう話、しばらく書きつづけたい。書きながら、小説世界をたのしんでいるのだ。「猫と庄造と二人のおんな」の小説世界はたしかにそんなたのしみをあたえてくれる。ことにその「フンシ」のおいのもつ力において。それが小説世界のなかにみなぎつてハリをあたえているがゆえに。

2 下手クソで、ゆたかな小説——有島武郎「迷路」

○

最近の『タイム』というアメリカ合州国の週刊雑誌に「新しい性道德」とか題した記事とも論説ともつかぬ一文がのつていた。読んでみたらちよつと面白かったので、予備校の教え子たちに英語の教材として読ませてみた。ヤンケロビッチとかいう世論調査会社にやらせた世論調査を材料にした文章だが、調査の項目は、「婚前性交は道德的にまちがっているか」、「十代性交は道德的にまちがっているか」、「夫（妻）は妻（夫）に忠実であるべきか」、「同性愛は道德的にまちがっているか」というような当代にしてはなほだ古風・保守的な項目だった。そういう世論調査で「性革命」起つて十年、はたして「新しい性道德」がアメリカ合州国人民のあいだに生まれて来つつあるか否かというようなことが判定できるかどうかはうたがわしいが、答はたいてい保守的、穩健なものであった。そういうのを教え子たちに読ませてみて、ひとつひとつの項目について、彼ら自身の反応を書かせたあとで（彼らの反応は、ただひとつの項目への反応を除いて、だいたい、アメリカ合州国の若者たちと一致した。ただひとつの項目というのは同性愛に関する項目で、日本ではその種の問題についての関心がまだ浅いのか、それとも問題そのものが深刻でないのか、大半が「判らない」と書いていた）、文章全体

についての感想を書かせる。それを宿題に出したら、ものものだけに、みんな、熱心に彼らにしては長文の文章を読んで長文の感想を書いて来た。

その感想についてここできながと書くというのではない。ただひとつのことを言っておきたいのだが、それは何人かが「道徳」とか「道徳的」ということばを問題にしていたことだ。みんな同じことを書いていて、一口にまとめ上げて言うなら、自分たちはそういうことばでものごとを考えたこととはない、生まれてこのかた一度たりともない——そういう感想になっていた。もちろん、この文章自体が「新しい性道徳」という題名のものであるから、そこからまずひつかかったらしいが、ひとりがうまいこと彼らの立場を代弁するように言っていた。たとえば、「同性愛がいい、わるい」は自分は言えるような気がする。しかし、それは「道徳的、いい、わるい」ということには必ずしもならない。実際、そういうことばで訊ねられてびっくりしたというのだ。世論調査はそこらあたりこまかく分けていて、「同性愛は道徳的にまちがっているか」という質問とは別に法律上の規制の是非のことを訊いていた。アメリカ合州国人民の答のことを言っておくと、前者の同性愛の道徳性善悪についての判断は今や善悪ハクチュウしている（二十年前なら、問題なしに「悪」論者が圧勝しただろうと『タイム』の一文は言っていたが、そのころアメリカ合州国にいてしきりに「ゲイ」たちとつき合っていた私としてはまったく同感だ）、そして法律的には規制すべきでないが多数派を占める。

そういう二様の訊ね方にびっくりしたのだとわが教え子は書いていた。自分の「いい、わるい」は、ひよつとしたら、法律的判断のことであつたかも知れない。それとも、「世間的」、「社会的」に「いい、わるい」ということなのかも知れない。いや、もっと端的に言えば、自分ひとりで勝手にそう決めて

いる。いずれにしても、基準は道德というようなものではない。

彼はそう書いていた。

○

正直な告白だし、なかなか鋭い指摘だと思う。彼が生まれ、育って来た私たち日本の戦後の社会、たしかに道德がくらしのすみずみにまで入り込んで、犬も歩けば棒にあたるように何ごとかをすればたちまち道德の問題にぶちあたる社会ではないだろう。こんなことは誰もが言っているようなことがらだが、それでも老人、中年男のお説教としてではなくてそこで生まれ育って来た人間自身の「発見」として述べられるとふしぎに新鮮味がある。彼はほんとうにその「発見」におどろき、衝撃を受けているのである。

もちろん、この今の日本の社会が道德がない社会だと言っているのではない。泥棒するのは、いぜんとして道德的にわるいことだろう。しかし、人の奥さんとねんごろになることはどうか。たとえば、道德に代えうるに愛というものが顔を出して来るにちがいない。人間のくらしのすみずみにまで道德がはりめぐらされているというようなことはもはやないのである。会計検査院のお役人の面々がどこか別のお役所の人たちに御馳走されて、おみやげまでもらった——あの事件について、税金のムダづかいであるという声は激しく起つても、道德的にまちがつているという声はたいして大きくはならない。それが端的に示されているのは、事件以後の各お役所の対応ぶりだろう。あるお役所は昼飯ぐらいかまわらないと言い、べつのお役所はコーヒーぐらい、と言う。ここでは本来的に質の問題であるは

ずの道徳がもつばら量の問題に還元されてしまっている。お金の額——税金の消費量、あるいは、それと自分のポケットマネーとの釣り合い、配分の問題となつてしまつてゐるのだ。もちろん、ここには、人民のものは「針一本」もとらないという道徳はそれに類似するものさえない。かつて世を騒がせた「全共闘」運動にもそうした道徳性はなかつた。「革命的道徳」に代うるに「革命的必要」の論理がもち出された。あるいは、「自己解放」の激情が——すくなくとも革命のすみずみにまで道徳がはりめぐらされてゐるといふありやうのものではそれはなかつた。

○

小説は何をどう書いてもよいのだから（前回にも書いたが、これが私の小説観の第一だ。第二は、小説は曰く言いがたしを書く。それを小説世界にまでつくり上げる）、逆に、読み手のほうから言えば、何をどう読みとつてもよい。この仮説に私の小説観の第二仮説をつけ加えると、曰く言いがたしの幅がひろければひろいほど、読み手の読み方の幅がひろがる。逆に、いろんな読み方ができる小説ほどいい小説かどうかは知らないが、ゆたかな小説だ。個人的な好みを言えば、私は下手クソでもゆたかな小説が、すくなくとも、上手で貧しい小説より好きだ。前者がここでとり上げようとする有島武郎氏の「迷路」だとすると、後者は日本の小説に数多くあるような気がするが、典型をひとつあげるとすればさしずめ志賀直哉氏の「暗夜行路」だろう。

有島氏の「迷路」は野上弥生子氏の同名の作品にくらべてたいして世評の高い小説ではない。お義理にもうまく出来ていないが、有島氏という人、私は下手クソでゆたかな小説を数多く書いた人だと

思う。そして、その生涯でただ一作、決定的に上手でゆたかな小説を書いた。すなわち、「或る女」。

世評高い小説ではないので、文庫本にはどこの社のものにも入っていないように思う。「日本文学全集」のたぐいにも入っていないように思うが、とにかく私のもっているのは大正年間に出た彼の個人全集に入っている分だ。いつのころからかこの小説の存在を知って一年に一度ぐらいは取り出して読むのだが、そのときどきにいろんな感慨がわく。それだけ、この小説、下手クソなくせに、そのふり幅はひろく、ふところはなかなか深いものに見えた。作者は大、中、小さまざまな問題をこれでもかこれでもかと言わんばかりに小説世界にまことに要領わるく不手ぎわにぶち込んでいて（下手クソの下手クソたるゆえんだ）、その力で押しつけて来るのだ。その力を感動させる力としてこちらが受け取るか、あるいは排斥してその小説世界の外に押し出す力として作用して来るか、そのところで同じ読み手でも読むときによって微妙に分かれたりする。もちろん、のつけから、こんなもの小説じゃなにかたづけ去ることもできる。

たとえば、この小説、主人公の「A」という、世間知らずの、傷つきやすい心をもった、それゆえにひとりよがりで傲慢な青年の「青春小説」として読むこともできる。何しろこの青年は年ごろの少女のちよつとした思わせぶりのコケットトリイに簡単にたぶらかされもすれば、年上の女性の彼の子供をおなかにもったという途方もないウソに翻ロウされもする。ちよつとした他人の言動に大げさに悩み、苦しみ、そうかと思うと、少女のコケットトリイにたぶらかされた夜には友人「K」のアパートを訪れて、「愛だつたんだ僕が探してゐたのは。僕は今日から生れ代る事が出来る。今日こそ僕の為に祝杯を挙げてくれ。僕は乞食の子一人の為めにも死んで見せる」と手前勝手なオダを上げる。こう

いう「A」の鼻持ちならなさを作者はうまく描き上げていた。なにしろ、「A」はどこへ行つても「永遠の処女」的存在を見出して、彼女の実名がどうあると、自分が勝手につけた名前であがめるのだ。「リリーの姿がこの二三日見えない。あの娘の名はリリーではない。イーデイスだとロバーツが教へてくれたが、僕には始めさうと思つたりリリーの名で彼女を記憶する方がいい。病的と云ひたいほど彼女に対して執着の強い僕に取つて、この悲惨な不幸人の集合所に（「A」は精神病院の看護人のアルバイトをしていた）、この淋しい荒んだ心の僕の境涯にリリーを見出したのは、云ひ現はし難い慰藉だ。」

こういうひとりよがりな傷つきやすい青年はいつの時代、いつの世の中にもいることだろう。彼はどこにでもすぐ「リリー」を見つけ、「リリー」を失なつて泣き、またべつの「リリー」をすぐ見つけ出す。こういう青年が出て来る小説世界はいくらもあるにちがいないが、ただこの有島氏の小説世界の場合、「リリー」の肌色は白くて、主人公のそれがそうではないという事実がきわ立つていて、そこから、別種の問題に読み手を導いて行くことができる。それはまだ、その事実が途方もない重みをもつた時代なのだ。「A」は「リリー」に教会のバザーでまえに会つたことがあると言われてすぐ思う。「僕の醜い而して黄色い皮膚の顔は彼女に憐憫の印象となつて残つたのかも知れないのだ。」

つまり、問題は、あるいは、アメリカ合衆国（西洋）対日本のことになつて来ていて、いや、もっと端的に、先進国対後進国、文明国対野蛮国、優秀国対劣等国の問題になつて来ていて、「迷路」の小説世界はそうした問題をぬきざしならないかたちで押し出して来る。

ジュリア——つまり、「A」のもうひとり、べつの「リリー」だ。彼女が言う。「亜米利加にあるの

は（ヨーロッパにくらべて）自由だけです。……金腐れテインテッドリバティの自由。」「A」は言う。「僕の国にはそんな自由すらないんですよ。」

その彼女の他愛のない、いかにもわがままに育つた良家の令嬢らしい思わせぶりのコケットリイに彼は簡単にたぶらかされて、彼女の「しなやかな、白い手を握らうとした。その素早い動作をひらりと裏切つて、彼女はもう彼から二三歩後ろにみた。

『何をなさるの。』

この冷やかな言葉を聞くと、さすがのAも一寸たぢろいだ。

『あなたは東洋の方ですよ。よござんすか。お忘れになつたんぢや有りますまいね。』

気まぐれな少女のコケットリイがここでさつきの問題、そこから出て来る「差別」に結びついている。彼が妊娠させたと思ひ込んだ年上の女性には別居中の夫「P」がいた。「P」は「P」で勝手にべつの女性と関係をもつていて、「P」夫人とは離婚しようとしている。それにもかかわらず彼女と関係をもつたと知ると（と言つても、彼が自分で「P」にうち明けたのだが）、ピストルを持ち出して、「どつちから始めた事だ」と訊く。「僕だ」と「A」は答える。「Pは満足と不満足を同時にしたたか飲みこませられたらしかつた——妻が主動者でないために満足を、而して皮膚の黄色い猿のやうな劣等人種の挑みに敗けた不満足を。——その顔はAに不時な笑ひの衝動を強ひる程洩かつた。」

こういう自分の後進性、野蛮性、劣等性の意識は、人間をナシヨナリストにさせるにちがいない。そのナシヨナリズムは彼のくらしのそれこそすみずみにまで及んでいて、たとえば、性欲をおさえることにまで顔を出す。日露戦争というナシヨナリズム喚起にかつこうな事件が海をこえた大陸で起つ

もちろん、この小説を、「私はあなたのお話に感激して罪を悔い改めた」、「私が不幸の淵に沈み果ててゐた時、あなたは神の名によつて同情を示して下さいました」というような手紙を故国の知人からもらうほど敬けんなキリスト教信者の「信仰小説」として読むこともできる。その、人にも感激されるほどの信者が性欲にさいなまれ、罪を犯し、悩み、苦しむ——そういう小説として読んで行くことはできる。

ただ、ここで面白いと思うのは、そういう悩み、苦しみが一向に神のまえで行なわれていないという気がして来ることだ。たしかに、神があるゆえに、その悩み、苦しみはある。それはたしかだが、ここにあるのはその神とじかに対面している悩める人間の姿ではない。神と自分とのあいだ、自分の性欲、罪、悩み、苦しみとのあいだに壁になるものがある、それはくらしのすみずみにまではりめぐらされた道徳——キリスト教道徳という壁だ。「A」は神にむかつてじかに救いを求める叫びをあげ、ザンゲのつぶやきをつぶやいているのではない。その壁にむかつてそうしている。壁は堅固で、叫びもつぶやきも決して通つて行きはしないだろう。彼もそれを知つていて、それゆえに、余計絶望的になる。ふしぎなことに（そう、たしかにふしぎなことだ）、この小説世界では壁があまりにぶあつく堅固なせい、神は愛をあたえるものとしてはいいない。神はただその壁の存在を保証するものとしてのみある。壁を人間のくらしのすみずみにまではりめぐらせる根拠としてのみある。

たとえば、この小説世界には天上の妙なる音楽の楽の音どころか、讚美歌ひとつ聞こえて来はしない。

○

「A」が日本にいたときには、そんなことはなかった。神も、信仰もつと甘美なものとしてあつた。彼が自分で言っている。「僕は恋人の胸に流す涙を、寝前の祈禱に流してゐた。恋人の手を撫でるやうに、独り山の奥に分け入つて白樺の滑らかな幹を撫でた。愛したい、命をかけて愛したいあの力強い衝動を、——僕は一人の女に与へる代りに、神の名によつて無暗にまぎ散らした。」

キリスト教の信仰は人間ひとりひとりの魂の問題であるとともに、普遍的世界観の問題だろう。その二つをつなぐ接点として、あるいは、触媒としてキリスト教道徳がある。乱暴な言い方をあえてして言えば、カトリックの場合、普遍的世界観を個人の魂に結びつけるものとして道徳があるような気がするが、プロテスタントの場合は関係がそこで逆になっているにちがいない。すくなくとも、プロテスタントがカトリックに対して反旗をひるがえしたときには、まず、キリスト教道徳にじかに結びついたかたちでの人間ひとりひとりの魂のことが問題だつた。道徳の正しさを保証するものはカトリックの場合は神を中心とした世界観であり世界だが、この場合はむしろ先験的に神と合一する正しさだろう。その先験的な道徳が逆に世界観をかたちづくり、世界そのものをつくり上げようとする。それはこの地上において、すくなくとも、「旧世界」においてはなかなかできがたいことだ。「新世界」でそれを十分に行なおうとしてもふしぎはない。

「新世界」にはそういう伝統は今でも残っているものらしくて、この文章のはじめにあげたヤンケロビッチの世論調査でも、プロテスタントたちはカトリックたちよりも一般的にかたい、反応を示してい

た。それは、さつきからの言い方を使って言えば、くらしのすみずみにまではりめぐらされたキリスト教道德の壁がそれだけかたいということだろう。

思うに「A」はアメリカ合州国でそのかたい壁——と言うよりは、壁のかたさにぶちあたったのだ。そのかたさは本来なら日本でもぶちあたつてもよいはずのものだったが、それがそうならなかつたところを見ると、かたさは日本までは入り込めていなかつたにちがいない。少しは入つて来ただろうが、くらしのすみずみにまで壁をはりめぐらせるまでにはとうていならなかつた。そこでもつばら信仰があるいは、キリスト教そのものが個人の魂の問題、その救済の問題だけのことになつてしまつても当然のことだろう。そこで必要なのは甘美な神の愛だけであつて、道德でも、まして、普遍的世界観、その世界観によつてかたちづくられる世界でもない。

こういうことのありようは今でも大いに見られることで、日本のキリスト教を信じる小説家のつくり出す小説世界のさまを見てみると、問題はまず、そして、たいがいはおしまひまで個人の魂（の救済）の問題であるように見えて来てならない。正直に言えば、どこでどうこれがキリスト教信者の書いた小説になるのかと考えさせられる小説が多いが（マルクス主義者の小説にも仏教信徒の小説にも同じ感じがするものが多いことも言つておいてもよい。もつとも、信仰と小説はまるつきり別の次元にぞくすることがらであると考えられることもできる。しかし、それなら、そういう種類の説得的な文学論を読んでみたい気もする。マルクス主義者の小説においてもこれは同じだ）、私が読んでみたいのは、べつに金芝河ばりに現実の矛盾と信仰の問題をぶちかませるといふような作品ではない。たとえば、同性愛に道德的に苦しむ小説であり（肯定、否定はこの場合問題ではない）、あるいは、キリス

ト教的世界観と科学的、あるいは、常識科学的世界観との相コクに悩む小説世界だ。ほんとうにどうして、神の存在をめぐって考えあぐねる主人公がそこに出て来たりしないのだろう。もちろん、貧乏で無知な老婆の魂と神とのふれあいというようなこともあつてもよいにちがいないが、そうした老婆の姿を小説世界のなかにうまく、いや、すくなくともゆたかに描ききるためには、今の日本のキリスト教信者の小説家たちの多くはあまりにも「プチ・ブルジョアジー」（ということばがようやく適切に使われるところにまで小説家をふくめて日本の市民社会のくらしは上昇して来ているようだ）の論理と倫理に閉じ込められてしまつているようだ。そういう小説家たちのキリスト教信仰告白ないし表明の文章を読んでいると、往々にして育ちのいい中流夫人の教会での上品なおしゃべりを聞いているような氣になつて来るのは否めない事実だ。

「A」が日本でふれていたキリスト教の信仰の世界はそうしたものであつたにちがいない。彼はアメリカ合州国へ行き、そこではじめてその世界のなかにはりめぐらされたかたいキリスト教道徳の壁にぶちあたつた。その壁は固くて、ぶあつくて、神は壁のむこうはるかにいる。

ということとは、神を中心とした普遍的世界観も世界も壁のむこうにあるということだろう。これはきわめて不寛容な世界のさまだ。同じキリスト教でもカトリックにくらべてプロテスタントの世界のほうが一見開かれて見えるように見えながらその実不寛容なのは、そこには、たとえば、その世界観と世界を「学習」することによつて、あるいは、華レイン儀式に自分を参加させることによつてそこに到達することが許されていないという事情があつたからにちがいない。そういうやり方で神の世界に入り込んで神のみまえに立つことはできなかつたのだ。信仰はまず、そして、あくまで道徳の間

題——道德の壁の問題だった。道德を全体的にわがものとしなにかぎり、その前衛の壁をこえることはできない。

しかし、その壁の普遍的正しさを先験的に保証しているものは何か。その普遍的正しさがその奥にある世界観と世界の普遍的正しさを保証しているのだが、それははたして何なのか。せんじつめて言えば、それはその道德の持ち主が正しいことを行なう人間であるということにはかならないのだが、そのこと自体を先験的にきめるのは、彼が白い肌を持ち主であるということであるのではないか。すくなくとも、それは彼がそうあることの十分要件ではないにしても必要要件であるにちがいない。「A」はすでにしてその必要要件を欠いている。

つづきは製品版でお読みください。